

北側の大広間に設えられた床の中で父が臨終の時をむかえている。周りを取り囲んで身内が固唾を飲んで見守っている。

突然、父が布団から枯れ枝のように細い腕を出して、長男の私において、おいでと手招きした。私は父の枕辺に膝行して父の口許に耳を近づけた。首を伸ばしてか細い声で父が「女は見掛けによらないよ」と言うと、ドサッと頭を枕に落とした。

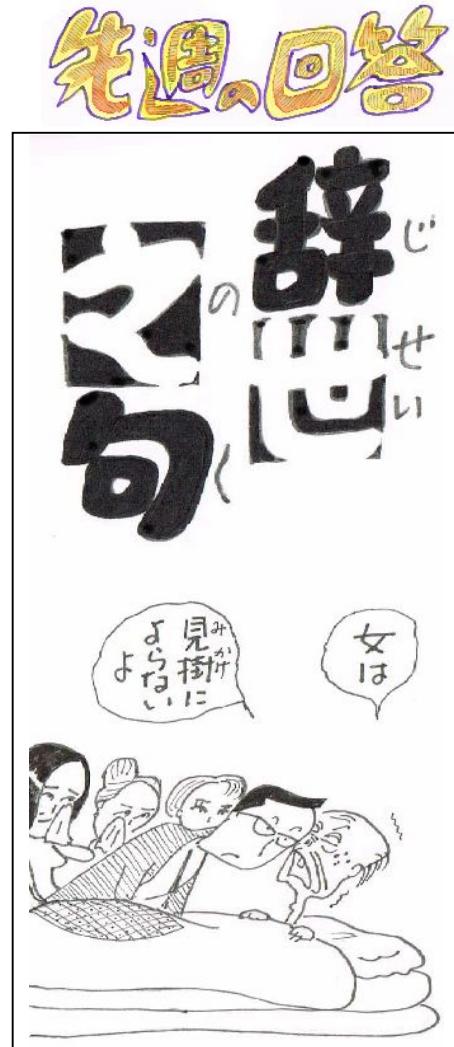
「ご臨終です」と枕頭の医師が静かに告げた。父の最後のことば「女は見掛けによらない」。誰のことだ? 見掛けによらない女とは。

私は思わず、周りで涙にくれている面々を見渡した。

子、私の義母である。父より四〇歳年下の三十八歳。色香の漂う女盛りの肢体の女、「もしかすると、この女は厚化粧で胡麻化しているが、実際は父より年上なではないか?」。

私は義母を凝視した(いや、いつだったか洗面所で顔を洗っていたのを見たが、顔には皺一本なかつた。見掛けどおりの年齢だ)。

私はその隣に座っている父の二号のアケミ(二十八歳)に目が留まつた(この女は、本当は男ではないのか、オカマ)。胸がペったんこだし、もしかすると夕方になるとうつすらと髭が生えるのでは・・・いや、そんなことはないか。この女は隣に座っている五歳の男の子を産んだんだから。までよ、このガキは本



当に親父の子なのか!」。
私は帰り支度をしている医師に耳打ちした。「まちがいありません。あの子の父親はあなたのお父さんです。これが証明しています」とDNA鑑定書を取り出した。

すると残るのは・・・。私は自分の妻の良子を見た(まさか、私の妻は見掛けどおりの非の打ちどころのない女だ。私は何を血迷っているんだ、バカバカしい)と苦笑しながら、自分の頭を叩いた。

※

良子さんはお風呂に入る時、絶対に鍵を掛けて入る。誰にも覗かれないために、衣服を脱いで湯殿に入つて、シャワーを浴びると全身から真っ白な肌色が水に流れる。

実は良子さんは黒人だったのである。なぜ父がそれを知っていたのかが謎ではあるが・・・。



今週の問題



□の中に漢字を埋めて
四字熟語を完成させてください。